

奪われた

ソウルブレイド

容易に想像がついている。



「二度あることは三度ある」という言葉はご存じだろう。対になる言葉として「三度目の正直」という言葉もあるが、どちらにせよ三度目が訪れたことに代わりはない。

「ねえお願いだよお……頼まれてよお」

泣き喚く汗ダルマホプキンスに対し、若きハンターアツシユ・カナンは溜息をついた。

「お前なあ……」

三度目ともなると、呆れると言うべきかあきらめと言うべきか、ともかく怒る気力がそがれる。

「で、次は何を何処で無くしたんだよ……」

アツシユも慣れたもので、ハリボテ空気ホデブが泣きついてきた事が何を物語っているのか、

「次はソウルブレイドですか……やることは同じでも、無くす物のグレードは上がっているんですね」

呆れ溜息をつきながら、今回も協力を要請され引き受けた双子の妹クロエが呟いた。

これまでにホプキンスは、大剣ヒトソードをドラゴンに、投アイズピナー刃をデ・ロル・レに奪われ、アツシユとウエイズ姉妹の協力の元、取り替えている。もっとも、「奪われた」という表現は適切ではない。武器の扱いを知らぬおぼっちゃまが、勝手に無くしたという方が正しいのだが。

「ホント、成長ないねえホプキンス。ブレイドって言ったら、結構な武器なのに」

アナが妹クロエに続き、呆れながら言葉を吐き捨てた。

彼女が言うように、ソウルブレイドといえ

それなりに強力な武器になる。

武器にはその系統毎にグレードが存在する。例えばホプキンスが最初になくしたソードは、大剣という系統の中では一番弱い部類に入り、次になくしたスピナーは、投刃の系統では二番目に弱い。そして今回のブレイドは、短剣の中では三番目に弱い武器。つまり、系統こそ違えど確実にグレードは上がっているのだ。

「大体、なんだって短ソウルブレイド 剣なんか…… フォーアスが使う武器じゃねえだろ」

アッシュの指摘はもつともだ。短剣ブレイドは二本で一对の短刀であり、それを両手に一本ずつ握り戦う武器だ。二本用いて戦う為に手数は多くなるのだが、俊敏性を重視する為に刀身が極端に短く、かなり接近しないと敵に当てられない弱点も持ち合わせている。つまり接近戦を得意とするハンター専用の武器と言っても過言ではなく、逆に接近戦とは縁遠いフォースが扱うような武器ではないといえる。

ホプキンスはこう見えても、高レベルのテク

ニツクを身に付けた……といっても、所持しているマグやユニット等の加護あつてのことだが…… フォースとしてハンターズに登録しているのだ。まあ仮にフォースでなかったとしても、とてもではないが接近戦を得意としているように見える体型ではないのだが。

「ほら、この前アナが使ってたでしょ。アレ見て格好いいなあとおもって……」

「クロエの次は私？ まったく、節操ないというか反省がないというか……」

アナが呆れるのも無理はない。以前投アイススピナー 刃を無くした…… というより、使えもしないその武器を持ちだした理由が、「クロエが使っているのを見て格好いいと思ったから」なのだから。「ボクの大切なソウルブレイド。パパから貰ったソウルブレイド。とっても大事にしたの…… お願いだよお、取り返して来てくれよお」
「…… だったら無理して使わず、金庫にでもしまっておけ。」

毎回毎回思うこと。三人は口にはしないもの

の、心の中で目の前のグラサンデブを罵った。

~~~~~

無くした武器のグレードも上がっていたが、それを無くした場所も、難易度を上げていた。

ラグオルでは地下に潜れば潜るほど、強敵が待ちかまえている。

一度目の舞台は森だった。二度目の舞台は洞窟だった。そして三度目となる今回は、洞窟よりももっと深いここ、坑道である。

「それでも、無くした場所は相変わらず「ボス」の部屋かよ……」

愚痴るアッシュに、ホプキンスが苦笑いを浮かべる。もっとも、それが申し訳ないという反省から来た謝罪の苦笑というよりは、返す言葉に詰まった、茶を濁す笑いでしかないことなどアッシュにも判っているが。

ハンターズ達は、というよりラグオルの現状を知る者達は、現在調査出来る範囲を四つのエ

リアに区分して考えている。その理由は、四つのエリアがそれぞれ地域的にも徘徊する怪物的にも全く異なっている為、上手く区分できるからである。

各エリアの最後には、そのエリアを代表するような大型の怪物が待ち受けている。まるでRPGのように。そんな事からも、その最後の大型怪物を通称「ボス」と呼んでいるのだ。

「この坑道エリアのボスは……ボル・オプトですな」

「そっかあ……あれは厄介だよねえ」

姉妹が話題にしたボル・オプトは、元々パイオニア1が設計した、坑道エリアを制御する為のコンピュータだった。ところが、そのコンピュータが突然狂いだし、坑道エリアを徘徊するロボット達を量産し続ける厄介な存在となっている。

そして更に厄介なのがこのボル・オプトそのもの。何度かハンター達によって破壊されているにもかかわらず、時を置いて修復され、復活

を果たすのだ。もちろんその原因も過程も不明なまま。故にボル・オプトも含め、坑道エリアは敵意をむき出しにした心なきロボット達で埋め尽くされているのだ。

「参考までに訊くが……」

参考になどならないだろうと思いつながら、アッシュは後ろをのたた歩くホプキンスへ振り返り尋ねた。

「どうやって無くした？ ソウルブレイドを」

アッシュの問いに姉妹達も興味があつたのか、足を止め皆が汗ダルマに視線を注いだ。当の汗ダルマは額から流れ落ちる汗を無駄に煌びやかなハンカチで拭いながら、口を開いた。

「ボル・オプトって、最初床からへんなのが飛び出して来るでしょ？」

ボル・オプトの正体は、大型制御コンピュータである。故に生物とは異なり、特殊な形状や弱点を持っている。このコンピュータは部屋全体が本体であり、中に入ってきたハンターズを様々な方法で排除しようと襲いかかってくる。

その一つが、ホプキンスの言う「床からへんなのを飛び出させる」、もう少し判りやすく言うと、床から突起物のような物を出現させるといふ攻撃を行ってくる。この突起物はただ飛び出すだけでなく、まるでテクニクのような攻撃を行い、しばらくすると又床の中へと戻っていく。

姉妹はホプキンスの曖昧な説明でも、彼が何を言いたいのかはすぐに理解した。なぜならば、彼女達はボル・オプトと戦った経験があるから。

対してアッシュは、ホプキンスが何を言わんとしているのか理解出来なかつた。なぜならば、彼はボル・オプトと戦った経験がないから。

「あ、ひょっとしてアッシュは判らなかつた？」  
眉間に皺を寄せているアッシュを見た肉団子が、まるで勝ち誇つたかのように尋ねてきた。自分はボル・オプトと戦つたことがある。たつたそれだけのことが、ホプキンスは何らかの優越感を得た気分であつたから。

「あのねえ、ボル・オプトというのはそもそも部屋全た……」

眉間に皺を寄せているアツシユを見た肉団子<sup>ホフキンス</sup>が、まるで参りましたとばかりに押し黙った。

この生意気なハリボテ空気デブ<sup>ホフキンス</sup>はボル・オプトと戦ったことがある。たったそれだけのことが、アツシユは何らかの劣等感を与えられた気分でしたから。

握りしめた拳がわなわなと震えている。脅えるボンレスハム<sup>ホフキンス</sup>は、その拳を見て押し黙ったのだ。

「……で？」

押し殺した声で、押し黙った相手に聞き返す。

「えーっと……あ、あのね？ とにかく、床から出てきた奴をバリバリと倒してたんだよ」  
ボル・オプトの説明を止め、最初の質問に対する返答を続けた。

「そしたら、床に穴が開いたままになっちゃって……」

床から飛び出す突起物をへし折ると、その突

起物を出していた床は開かれたまま、閉じるこ  
とがない。アツシユには詳しい情景を思い浮か  
べることは出来ないが、何となく「そういう事  
がある」と理解した。

「その手前で思わずこけちゃって……その……  
穴の中に……」

「あー、もういい。判った」

ここまで聞けば、ボル・オプトを知らないア  
ツシユでも想像がつく。

握りしめた武器を、彼がどうして手放したの  
かは、この際どうでも良い。

重要なのは……。

「今回ばかりは、ちょっと回収出来そうにない  
ですね……」

「んー、運良くこの前のように、敵のどつかに  
刺さっていればいいけど……ちょっと無理っば  
いよね」

「だなあ。まあとりあえず行くだけ行こうぜ」

今回ばかりは無駄骨になるかもしれない。重  
い空気の中重い足取りで、とりあえずは現場へ



を繰り返す攻撃を重ね、敵を仕留めるようプログラムされている。プログラム故、その攻防にはある種パターン化されたものがあり、臨機応変な対応で挑めば、後れを取ることなくどうにか撃退出来るはずだ。

だが、単純なこのパターンに、アッシュはあっさり引っかかるのだ。

攻撃され、その後反撃しようにも敵は飛び退いている。そして熱くなったアッシュが追いかけると、別の敵がアッシュの退路を断ち、愚かなネズミを取り囲む。パターン化しているはずのシノワのやり口にアッシュは乗せられ、まるで彼の方がパターン化しているのではと疑いなくなるほどあっさり引っかかる。

「アナはホプキンスさんをお願い」

「OK。まったく、二人とも世話焼ける……」

袋のネズミと化したアッシュが、それでもどうにか生き長らえているのは、ひとえにクロエの支援あってこそだろう。

「アッシュ君、こっち！ 熱くならないで戻っ

て！」

「お、おう！」

さすがのアッシュも、取り囲まれた後ならば、自分が深追いしていることに気付く。クロエが投刃で敵の足をまとめて止めている隙に、アッシュはどうかにか、三人の元へと合流する。

本来なら、ここにフォースの支援が加わっても良いだろう。

だが、それを汗ダルマに求めるのは酷というもの。

「わ、うわあ！ 来るなよあ！」

「ホプキンス、テクニックを乱射しないで！」  
テクニックは状況を冷静に判断し、的確且つ効率よく使用するのが望ましい。相手とテクニクの相性によつては、効果が相乗したり減少したりもするのだから。まして無限に使える物ではなく使用に限りがある以上は、無駄な消費は控えるべきだ。

群がる敵に脅え、辺り構わず攻撃テクニクを乱発する底抜けピヤ樽。テクニクの威力

だけが高い為、あながち無駄にはならないのだが、効率が悪いのは確か。

「はあはあ……もうダメえ……」

「ったく！ だから乱発しないでつて言ってるのに……」

こうして、テクニクスの元となる精神<sup>T</sup>力<sup>P</sup>を使い切り、ただの肉団子と化す。その肉団子を好物としているかのごとく、シノワがわらわらと集まりだした。

「このっ！」

もはや、肉団子<sup>ホフキンス</sup>はただのお荷物。それを守りながらの戦闘は、アナ一人ではかなり厳しい。

「ギゾンデ！ アナ、大丈夫！」

「なんとかね」

アッシュを連れ戻したクロエが、ホフキンスに代わりテクニクで支援する。

シノワの弱点は雷<sup>ソウデ</sup>系統のものではない。ダメージを狙うなら、クロエのテクニク<sup>選</sup>は過<sup>あやま</sup>ちとなる。だが、クロエの狙いは相手にダメージを与えることではない。

「アッシュ君、その痺<sup>しび</sup>れたのをお願い！」

「オツケー！」

一体の敵<sup>シノワ</sup>が、まるで感電でもしたかのように動かなくなっている。いや、実際に感電しているのだ。

シノワはロボット、つまり機械出てきている。その為か、雷<sup>ソウデ</sup>系統の攻撃で時折内部がスパークし、一時的に動かなくなることがある。クロエはこれを狙っていたのだ。仮に一体も感電する物がいなくなっても、アナに群がるシノワ達を一瞬だが足止めする事が出来る。アナほどの腕があれば、この一瞬が貴重な時間になる。

「かぶ飲みしないでよね。数に限りがあるんだから」

「う、うん」

敵が足を止めた隙。この一瞬の時間を用いて、アナはピルケースを底<sup>ホ</sup>抜<sup>フ</sup>け<sup>キ</sup>ビヤ樽<sup>ンス</sup>に手渡し、そしてすぐ両手のダガーを握りしめる。

ピルケースの中身は精神<sup>トリ</sup>高揚<sup>フル</sup>材<sup>イド</sup>。疲れ切った精神<sup>T</sup>を<sup>P</sup>を一気に回復させ、またテクニクを使用

出来るようにする為の回復剤だ。

姉アナとクロエ 妹はハンターを生業なりわいに、二人だけで生き

抜いてきた。生き抜く為の術を様々身に付けながら。そんな二人だから、ハンターでありながらテクニクの使用どころを誤あやまらない。何でも手に入る裕福な環境で育った贅沢ホちびデブとは訳が違う。「腕が立つ」とは、彼女達のようなハンターズにこそ送る賛辞だろう。

「せいっ！」

そんな「腕が立つ」ハンターを目指す若者アッシュも、ここ最近はめきめきと腕を上げている。動きを止められているとはいえ、一体のシノワをアッシュは見事撃破していた。

「次！」

両端に延びる緑色のフォトンが、綺麗な弧線こせんを描きながらシノワに襲いかかる。

アッシュの使う両ダブルセイバー 剣は、短剣ダガーのように両端の刃で交互に切り裂く為手数を増やしてくれる。だがその特殊な形状は、短剣ダガー以上に扱いが難しい。

そんな両ダブルセイバー 剣を、アッシュはかなり使いこなせるようになっていた。それだけでも、腕を上げていると言えるだろう。

「はっ！」

袈裟懸けに一撃。

「くっ！」

そのまま逆袈裟へ切り返し二撃三撃。

「せいやつ！」

そして身体を回しながらまた袈裟懸けに四、

五、六撃。

両ダブルセイバー 剣を上手く回し扱いながら、巧みな動作で敵シノワを斬りつけていく。その技は見事の一言に尽きる。

「あつ、待てこのっ！」

「アッシュ君待って！」

完全に破壊しきれなかったシノワが飛び退く。それを追いかけるアッシュ。そしてまた、別のシノワに退路を断たれる。

腕は上げている。それは確かなのだが、彼のように熱くなり突っ込む癖くせだけは直りそうにな



かった。

「しばらくすると、中央に本体が降りてきますから、それを徹底的に斬りつけてください」

もちろん、ボル・オプト敵も黙ってやられるわけはな

い。様々な反撃のパターンを一つ一つ教わりながら、アツシユはそれを学んでいった。

いくらつまらないプライドを持ち合わせるアツシユとはいえ、彼もハンターズの一人。口頭ではあるが、一つ一つを出来る限り頭に入れるよう努力は怠らない。

（変な所ひねくれてる癖に、変な所素直なんだよねえ）

クロエの講義を受講する熱心なアツシユの姿を見ながら、アナは苦笑いを浮かべていた。

~~~~~

四方八方をモニターで囲まれた部屋。ここがボル・オプトが住まう、いやボル・オプトそのものとなっている部屋だ。

真つ赤なライトがけたたましい警告音と共に灯り、一同を否応もなく緊張させる。

そしてモニターの一つに、不気味なモニュメントが映し出された。先ほどアナが言っていた「目玉を縦にしたような奴」だ。映し出された目玉のモニュメントは、まるでモニターの間をフラフラと泳ぐように移動していく。

アツシユはその目玉が気にはなるものの、言われた通り無視を決め込み、アナとクロエが賢明に目玉の映るモニターを追いかけ攻撃しているのには加わらなかつた。

（赤い奴……赤い奴……）

突起物は数多飛び出すという。その中で、赤く点灯しているのは一つらしい。しかもその赤いのをすぐさま叩かなければ、反撃されることもあるらしい。

見つけ次第すぐに叩き壊さなければ。アツシユはその事に集中する為、心で何度も唱えながら集中した。

「アツシユ、来るよ！」

モニターから目玉が消えた。これは次に、床から突起物が飛び出す前兆。アナはそれをアツシユに叫び伝えた。

刹那、床から突起物と何かが飛び出した。

ぽーんと、飛び出した何か。それはどうも、突起物によって打ち上げられたようで、しばらく空を遊覧した後、からんと音を立ててそれは床に落ちた。

「あつ！ 僕の大事なソウルブレイド！」

そう。それは穴に落ちたソウルブレイド。元々ボル・オプトの突起物が壊された跡である穴に落ちたそれは、ボル・オプトの再生機能が幸いし、こうしてボル・オプトによって押し出されたのだ。

悪運だけは強い奴。

突然飛び出したソウルブレイドに驚きながら、三人はおぼっちゃまの強運に呆れていた。もつとも、強運の持ち主ならば、そもそもソウルブレイドを無くしたりはしないだろうが。

「やったあ！ 僕のソウルブ……ギャア！」

落ちたソウルブレイドに駆け寄り拾おうとした汗ダルマに、落雷が襲った。

「あつ、忘れてた」

飛び出したソウルブレイドにアツシユは目を奪われ、突起物の事をすっかり忘れていた。その為ボル・オプトの反撃を許し、こうしてホプキンスが落雷に見舞われてしまった。しかしアツシユを責めることは出来ないだろう。予測外に飛び出したソウルブレイドに、アナもクロエも、もちろんホプキンスも目を奪われていたのだから。

こう言っではなんだが、要するに、ホプキンスに運などは無いということだろう。

派手な爆音と共に、部屋全体が揺れる。

幾つかの突起物を破壊したことで、どうやらボル・オプトが耐えきれなくなり本体を晒す前兆のようだ。初対戦となるアツシユにも、それを予感し、そしてそれは正しいことをすぐに知る。

「でけえ……」

天井から降りてくる本体を見上げ、その大きさに驚愕するアツシュ。

しかしだからといって、この程度で怯むことはない。

確かに大きい。部屋の中央に陣取った本体は、部屋の半分を埋め尽くしているのだから。しかしこれまでも、大きな敵エネミーなら何度か相手にしている。

ドラゴン。デ・ロル・レ。奴らに比べれば、ボル・オプトはそう大きい相手ではない。

「よし！」

まずは敵ボル・オプトが仕掛けてくる前に、少しでもダメージを。アツシュは敵ボル・オプトに駆け寄り、手にした両ダブルセイバー剣を振るう。その度に、ガシガシと金属が削れていく音が響く。

「来るわよ！」

クロエが警告の声を上げる。まずは巨大なミサイルポットを開け、無数の追尾ミサイルを放つ。

「うわあつ！」

狙われたのは、「回避」という行動をもつとも不得手としている汗ホプキンスダルマ。

このミサイル。一度狙われると全てを回避するのは難しい。それはアナやクロエにしてもそうだ。

では、どうするべきか？

まずは他の仲間を巻き込まないように、一人で皆から離れるべきだろう。そうやって被害を最小限に抑えるのが先決だ。

ミサイル群はその数にまず脅えてしまうが、全てのミサイルが効率よく一人にダメージを与える方が難しい。一発のミサイルが爆発すると、その爆風で他のミサイルの爆風を押さえ、ダメージを抑えてしまうからだ。つまり一人ならダメージはミサイル一発分ですむかもしれないだ。

「助けてアツシュウ！」

「バカ、こつちに来るな！」

そんな効率的戦法など、汗ホプキンスダルマが知るはず

行方が気になった。

「ああ、パパに返したよ」

「は？」

三人の声が綺麗に八モる。

大事だ大事だと騒いでいた二つの武器。大事な物をあっさり無くすのも信じられないが、それをあっさり返却した事も信じられない。

「だつ、だつてさ。僕じゃ使えないんだもん。」

そうだ、このソウルブレイドもパパに返して、

新しい武器を貰おうかなあ」

おぼっちゃんまにしてみれば、パパから貰った大切な武器を無くしたことが一大事であり、それを知られるのが怖いのだ。つまり武器そのものに愛着などはない。

「そういえば、アッシュの使っていた武器も格好いいよね。次はその……って、どうしたの？みんな」

ハンターとして、三人には武器に対しそれ相應の愛着がありこだわりがある。

使えもしない武器を振り回し、それをあっさ

り無くし、騒ぎ立てるだけでも三人には信じられない行為である。にもかかわらず、取り戻した武器をあっさり手放し、次の武器玩具を手に入れようとは。

そもそも、武器とは自分の身を守る、ハンターとして大切な道具相棒である。だからこそ、より強い武器を手に入れようと皆必至なのだ。特にレアと呼ばれるような貴重な武器は、皆喉から手が出るほどに欲している。

おぼっちゃんまが貰い受けている武器は、まだレアと呼ばれるほど貴重な武器ではないが、しかしそれ相應に貴重な武器であり、入手が困難な物ばかりだ。

苦労して今の武器を手に入れた三人にしてみれば、このおぼっちゃんまの甘ったれた考え方が気に入らない。

「そうね……なんなら、あなたにどんな武器が合うか、私達が教えてあげましょうか？身体でね」

三人の中でも、特にこういうおぼっちゃんま気

質を嫌うクロエが、当のおぼっちゃんホッペンに提案をした。

「ホント！ うんうん、お願いするよお！」

口元をつり上げ、冷たく笑うクロエ。その様子にホッペンは気付いていないのか、申し出を喜んで受けた。

（来たあ……クロエこええ……）

（まあ……こつちも良いストレスの発散になるし）

クロエの考えに気付いた二人は、こそこそと耳打ちし合った。この後に待ち受けるであろう地獄絵図を思い浮かべながら。

言うまでもないことだが、この後バーチャルルームにて、一人の情けないフォースが悲鳴を上げ続けることになる。